

シリーズ

とき

季のことば「秋」



「ことば」によって

豊かな四季を楽しむ私たち日本人。

名句や名歌を訪ねながら、

日本文化の豊かさをご紹介します。



季ときのことば 秋

私たち日本人は、季ときに名前をつけ、豊かな四季を楽しむ術をもっています。季ときのことはの美しさを感じ、季節のうつろいの中に「ゆとり」をみつけてみませんか。



暦の上では、秋とは「立秋」(2020年は8月7日)から「立冬」(同11月7日)の前日まで。「花」といえば春の季語となるのと同様、「月」は「秋」の季語です。秋は実りの季節。稲や作物の収穫を祝うお祭りが、日本全国で行われます。十五夜の月見もまた、欠けない満月を豊穰の象徴とみなし、大地の恵みに感謝する収穫祭です。脂がのる「秋刀魚」に「鯛」、「鮭」もまた秋の季語。「新蕎麦」に「新酒」、「新豆腐」など、収穫された自然の恵みが食卓に並ぶうれしい季節です。

晩秋のフィナーレを飾るのは、色とりどりの紅葉。「紅葉」、「黄葉」と書いて、どちらも「もみじ」と読みます。楓が代表的ですが、漆、銀杏、柿などもきれいに色づきます。古代では、葉が色づくことを「もみつ」と言っていたようで、名詞化して「もみち」に、平安時代になって「もみぢ」となりました。紅葉を見に山野へ出かける紅葉狩りはこの時期の風物詩で、「源氏物語」にも登場します。





ちはやぶる神代もきかず竜田川
 からくれなるに水くくるとは

在原業平

秋のことは

釣瓶落し [つるべおとし]

釣瓶が井戸の中に落ちるように、秋の日はすぐに暮れてしまう様をたとえたもの。

十三夜 [じゅうさんや]

お月見は旧暦の八月十五日の名月と共に、九月十三日の月「十三夜」も愛でるのが風流と言われ、合わせて二夜の月と呼ばれた。十三夜は「後の月」とも称される。

水澄む [みずすむ]

秋は空も水も澄み渡る季節。湖や川の透明度が上がリ、水底まで見える。

菊膳 [きくなます]

古代から愛でられた菊は生命力の象徴。食用の花びらを茹でて、三杯酢や辛子酢で和える。香り高く、歯触りも良い。

案山子 [かかし]

鳥獣の害から守るため田畑に立てる。元は焼いた鳥獣の肉や毛の悪臭で追い払ったため「嗅がし」と呼ばれた。



野分 [のわき]

秋の野の草や花を吹き分けるような暴風や台風のこと。

夜食 [やしよく]

秋になり夜が長くなると、農家では夜なべ仕事をし、夜食を食べていた。今はサラリーマンの残業食や受験生の軽食にも。

障子洗ふ [しょうじあらう]

冬に備えて障子を貼り替えること。水をかけて洗いながら剥がし、新しい障子紙を貼った。「障子」だけだと冬の季節。

秋の名句

名月をとつてくれろと泣く子かな
 小林一茶 [季語] 名月

障子しめて四方の紅葉を感じをり
 星野立子 [季語] 紅葉 (もみぢ)

秋七草嫌ひな花は一つもなし
 鈴木真砂女 [季語] 秋七草

新蕎麦やむぐらの宿の根来椀
 与謝蕪村 [季語] 新蕎麦

暮色濃く鰯焼く香の豊かなる
 山口誓子 [季語] 鰯

秋の名歌

白玉の歯にしみとおる秋の夜の
 酒はしづかに飲むべかりけり
 若山牧水

秋の菊にほふかぎりはかざしてむ
 花より先としらぬわが身を

紀貫之